

令和3年度浜松市要介護度改善評価事業

# 半側空間無視に対する 気づきへのアプローチの経験

---

医療法人社団やわらぎ  
デイ・なかむら  
作業療法士 嶋倉智恵子

# 施設紹介

---

平成10年 なかむらクリニック（神経内科・内科・リハビリテーション科）開院

平成11年 医療法人社団やわらぎ 通所リハビリ「デイ・なかむら」開所

## —理念—

リハビリに取り組まれる方、そのご家族一人  
ひとりのQOL向上を目指して、一緒に取り  
組み、一緒に考えます



# はじめに

---

半側空間無視(unilateral spatial neglect ; 以下、USN) :

- ・ 大脳半球病巣の対側の刺激を発見し、応答・反応することの障害
- ・ 目標物に気づけず生活上で支障が出るだけでなく、危険回避の困難さから監視や介助が必要となることが多い
- ・ それ自体が見落としに対する病識の欠如と一体であると言われ、患者自身はその障害に気づきにくく自覚に乏しい、洞察の障害があるとされている



障害への「気づき」に重点を置きアプローチを実施

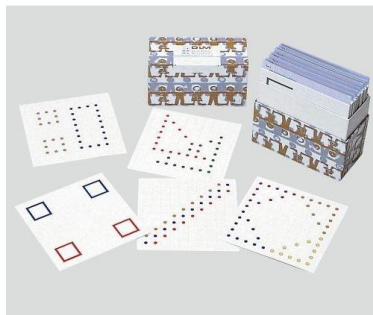
# 症例

---

- 80代男性. 200X年3月右脳梗塞、側頭葉てんかん発症、要介護度2  
通院治療開始とともに、当施設通所リハビリ週3回利用開始
- 身体機能：軽度左片麻痺、筋力低下あるが独歩可能
- ADL：B.I 85点（更衣・入浴・階段昇降で減点）
- 高次脳機能：左USN、注意障害、構成障害
  - 机上検査 MMSE20/30点、FAB10/18点、立方体模写不可
  - 行動観察 左側からの声かけに反応が乏しい、左手の不使用、  
カーブで身体が接触する等
- 家族構成：認知症の妻との二人暮らし（key person:息子 県外在住）

# 方法

- 一般的な運動プログラムに加え、「ペグボード中セットデザイン集付き」



- デザイン152枚
- 課題の難易度は8段階に設定



中型ペグボードセット(引出付)240. プラス株式会社スマート介護企画部  
ペグボードデザイン集(DM # 150). プラス株式会社ディー・エル・エム事業部

- 時事問題への関心が高い → 積極的に新聞に目を通す
- 気づきを促す環境設定：荷物の置き場所、移動時の声かけ 等

# 結果

左側の見落としや図形の崩れあり、指摘されることによりミスが左側に集中していることに気づく

単純デザインは指摘により修正可能も、難易度が上がるにつれ見直しを繰り返しても修正できない

## 症例

「頭がへんだね」  
「おかしくなっちゃった」

作業を要素別に行う手順を  
繰り返し実施

誤りが減少  
作業速度改善

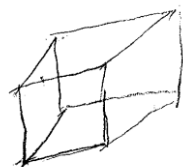
MMSE27/30点、FAB15/18点、  
立方体模写が可能  
ADL概ね自立  
バスを利用し、外出可能



2019.4



2019.6



2020.4



2020.8

# 考察 (1/3)

---

## 先行研究

- ・ 石合：見落としのフィードバック、U S Nに伴っておこる危険、問題点、対応方法の指導が重要
- ・ 福本ら：「誤りなし学習」を応用し、〈こうすればうまくいく〉というように積極的に改善の方向に動機付けすることで、自尊心や意欲を高めながら訓練に継続的に取り組むことができる
- ・ Crossonら：3タイプの気づき
  - ①知的気づき
  - ②体験的気づき
  - ③予測的気づき

# 考察 (2/3)

## 症例

OTからの説明や  
指摘を受け入れる

失敗を回避する  
左USN対策が実行  
可能に

失敗経験を経ることで  
USNを認識し、徐々に  
代償手段を獲得

自身の障害に  
ついて理解  
しようとする  
努力

- ・リハビリ意欲  
の維持
- ・USNの自覚を  
深める



# 考察 (3/3)

---

山田 「脳の機能がうまく働かなくなっている自分のことを、自分自身の力でモニターする力を強くしていくことを目指すことこそ、患者さんにとって最優先に必要なこと」

山田規畝子：高次脳機能障害者の世界から：会話の力。コミュニケーション障害学30, 159-164. 2013.

**症例** 生活のどのようなことに影響するか予測し、習慣として左USN対策をとれるようになることが目標

# 結論と今後の展開 (1/2)

---

- ・ 従来の正しい認知のみを教える「健常性の注文的治療」から、症例自身からの気づきや解決策を引き出す「**健常性の開発的治療**」を積極的に取り入れることが重要
- ・ 障害の理解を深め、ご本人の思いに寄り添い環境を整えることは機能改善やADL・IADLの向上につながる

# 結論と今後の展開 (2/2)

---

- ・ 誤りの指摘にとどまらず、**<こうすればうまくいく>**という改善方向に導く声かけを関わりの中で積極的に取り入れる、生活の中で困難さを感じることについて職員間で情報を共有し、安定した関わりを持つことでご本人の自尊心を維持し、効果的なリハビリの継続が可能となりwin-winの関係を構築できる
- ・ 高次脳機能障害は体調や環境変化により、**症状の程度が変動しやすい**ため、生活状況を観察し継続的に支援していくことが大切

# 参考文献(1/2)

---

- 1)服部文忠：脳卒中リハビリテーション医療と脳画像. Jpn J Rehabil Med 2019 ; 56 : 310-315
- 2)山本麻子, 大嶋伸雄：左半側空間無視患者の障害に対する気づきのプロセス. 作業療法32 : 160-170, 2013.
- 3)平林一 他：脳血管障害における注意障害のリハビリテーション. 失語症研究18(2) : 127-13, 1998.
- 4)石合純夫：方向性注意障害のメカニズムとリハビリテーション. 脳の科学24 : 531-539, 2002.
- 5)福本倫之 他：注意障害に対する認知リハビリテーションー誤りなし学習に配慮してー. 土佐リハビリテーションジャーナル5 : 21-27, 2006

## 参考文献(2/2)

---

- 6) Wilson BA, Baddeley A et al : Errorless learning in the rehabilitation of memory impaired people. Neuropsychol Rehabil, 4 : 307-326, 1994.
- 7)山田規畝子 : 壊れた脳 生存する知. 講談社, 2004.
- 8)山田規畝子 : 壊れた脳も学習する. 角川学芸出版, 2011.
- 9)坂爪一幸 : 高次脳機能の障害心理学—神経心理学的症状とリハビリテーションアプローチ—. 学文社, 2007.